

書籍案内

小説で読む行政事件訴訟法

木山泰嗣 弁護士 著

国や自治体を相手取る行政訴訟には特殊性がある。「『行政の安定性』を担保するため」などと説明される短い提訴期間が代表的なものだ。そして「行政訴訟は勝てない」ともいわれる。やや大ざっぱに言えば、行政訴訟は、民事訴訟よりもキビしい。

さて、行政訴訟の中でも税務訴訟は、不服申立の前置（ぜんち）など、訴えるまでにハードルが設けられている。そして、勝訴率の低さも盛んに言及されるところ。キビしさに着目すれば、税務訴訟は、行政訴訟の中の行政訴訟といえるだろう。

『小説で読む行政事件訴訟法』（法学書院、写真）の著者である木山泰嗣弁護士は、その税務訴訟に弁護士1年目から多数携わってきた。難しい案件に最善の結果を出すための方法を研さんし、信頼を得ている。

本書は、法律のエッセンスを物語で説明する新境地を開いた前作『小説で読む民事訴訟法』の続編。主人公のロースクール生・佐伯が、研修先の法律事務所で税務訴訟の現場を目の当たりにし、未来の法律家として成長していく。小説には、行訴法はもちろん、国家賠償法、行政手続法などの要点が随所にちりばめられている。また、税務訴訟を取り上げることで、行政訴訟の特殊性、そして民事訴訟との共通点もむしろ際立っている。

著者は、本書では前作より「物語としての躍動感」を重視したという。小説では、進行する税務訴訟のストーリーラインに、佐伯の恋人が受けるストーカー事件、それにまつわる研修仲間への疑心暗鬼などサイドストーリーが絡む。ここからは、生身の人間がかかわる「生きた法律」である訴訟法の解説と、表現形式としての小説の相性の良さについて、木山氏が確信を強くした様子もうかがわれる。定価2千円（税別）。

